



妊娠による身体の変化はお口の中にも著しく現れることがあります。ホルモンバランスの変化、食生活パターンの変化などが妊婦さんのお口の環境を悪化させます。

(1) 歯肉炎・歯周炎

妊婦さんのお口には、歯肉炎や歯周炎が比較的多く見られます。その原因は、つわりや間食の増加などによって歯磨きを充分に行えないなどの理由で、お口の中が不潔になりやすいこと、および女性ホルモンの増加などの影響と考えられています。歯周病菌は女性ホルモンの影響で増殖するものがあり、また女性毛細血管や細胞に作用して歯周病を悪化させるとも言われています。歯周病が進んだ妊婦さんでは早産および低体重児出産の危険性がいった報告があります。



(2) むし歯

つわりや間食の増加のためにお口の清掃が不十分になったり、女性ホルモンの増加により唾液の性状が変わるため、むし歯になりやすい状態であると考えられています。



原因としては、

- ①ホルモンのバランスで唾液が粘り、食べカスが残しやすい。
- ②唾液が酸性に傾き、口の中の細菌が増えやすい。
- ③食事や間食の回数が多くなり、結果として口の中が不衛生になりがちになります。
- ④悪阻（つわり）によって胃酸が逆流し、口の中の酸性度がさらに高まる。その結果として歯が溶けやすい環境になります。
- ⑤つわりがひどくて歯ブラシを口に入れるのもイヤになり歯磨きをさぼってしまう。
- ⑥酸っぱいものを食べたいくなるのでお口の中が酸性に傾くのも一因と思われます。

とにかく口のなかを衛生的にするように気をつけましょう！

たとえば『気持ち悪くても、必ず寝る前には歯を磨く』など、ルールを作ると実行しやすいと思います。また、歯ブラシを口に入れられなくても、ぶくぶくうがいするだけでも効果的。食べたらずぐうがいをしましょう。

歯磨きやむし歯の治療を行い母親自身のむし歯菌を減らしておくことが大切です！



診察時間 月～金曜日 9:30～13:00 15:00～19:00 土曜日 隔週 9:30～13:00

休診日 日曜日・祝日・(土曜日)土曜日についてはお問い合わせ下さい ☎0797-31-0022

生まれてすぐの赤ちゃんの口の中には、むし菌はいません。唾液を介して母親のむし菌が子どもの口腔内に感染すると言われています。母親のむし菌が少ないほどその子どもへの感染は少なくなります。

妊娠中に歯科治療がおこなえる時期

原則的に妊娠中に一般的な歯科治療を行なってはいけないという時期はありません。

妊娠初期、妊娠後期は基本的に応急処置になります。

妊娠中期(5ヶ月～8ヶ月)であればほとんどの治療が問題なくできます。

一般的に抜歯はしないことが多いです。

必要があれば安定期に積極的に治療することをお勧めします。

できれば分娩までに治療を済ませておくことをお勧めします。出産後は育児におわれたり、あるいは子供の面倒をみてくれる方がいないなどの理由から放置し症状を悪化させてしまったり、歯の治療に関して慎重になり、受診されるのが遅れがちになる方がいらっしゃいます。

X線撮影(レントゲン)について

歯科の場合直接お腹にX線があたりません。防護エプロンを着用しポイントを守ればお腹の赤ちゃんへの影響はありません。**森歯科医院は最新のデジタルレントゲンなので通常のものより約十分の一程度の線量で撮影が可能です。**



麻酔について

一般的に歯科麻酔は局部麻酔です。通常量の使用では母子ともに全く影響はありません。麻酔の処置を行い、リラックスして治療を受けましょう。

お薬について

原則として妊娠中の患者様には投薬はしません。ただし痛みがひどい場合は我慢することで逆にお腹の赤ちゃんに悪い影響を与えることがあるため、産婦人科の先生と相談した上で投薬することもあります。

